書評

秦玄龍 イギリス・ヨーマンの研究

一般に英国農業史に関する著書・論文の乏しい昨今、英国農業史研究の焦点とも云うべきイギリス・ヨーマンの研究と云う秦玄龍氏の大著を得た事は誠に喜ばしい事である。封建制社会の崩壊、資本主義社会の胎動と云うべき時期に関する経済史的研究は、近時、一応半は古典的に、時に論争を含み乍らも、一つの大体の輪郭が描かれており、云わば研究が停滞せるの感がなくはなかつたが、さきに福島大学経済学部の吉岡昭彦氏により、「イギリス絶対王政成立期の農民層分解」と云う頗る野心的な論文を得、一つの問題が示唆されたが、殆ど時を同じくして出た秦氏の此の著作も、中に同様な問題を含んでおり、此れを契機に吾が国英国史学界も一つの課題を得た様に思われる。以下若干の続み違いのある事を恐れつつも、本書を各章について、私の感想を混えつつ簡単に紹介を試みたい。

先づ序章「独立自営農民についての基礎理論」においては、独立自営農民は封建的土地所有の解体過程に現われてくる所の特殊歴史的範疇である事に注意して論を進め、封建的土地所有、農奴制生産様式の崩壊過程より独立自営農民の出現を論じ、商品—貨幣経済の拡大、貨幣地代の一般的成立、物価の上昇等に伴い、所謂封建的危機が一層明確になると共に農民層の独立自営農民、労働者への分化が絶えず進行し、独立自営農民の一部は経営を拡大して市場生産を行い、利潤を生みそれの資本への転化を初めては来たが、然し乍らなお封建的土地所有は続くのであり、その様な封建制の残存がイギリス絶対王朝の社会的物質的基礎となるとして、イギリス絶対王政の性格を従来より可成り明確に基礎づけられる。即ち、周知の農民層の資本制分化の進行の一方で、第三章の終りで触れられる通り、土地所有の封建的再編成、寄生地主的再編成も同時にあつたのであり、その事は都市ツンフトの前期的商人、前貸制問屋商人による支配と並行して、チュードル・スチュアート王朝の財政的基礎となつて行く事に明瞭に続み取られると云われる。先づ吾々は此の独立自営農民層の分解の中より gentry, esquire へ寄生地主化するヨーマンの反動的昇華とも云ふべき事態に注意を喚起させられるのである。

第一章「フリーホールダーの系譜」では、農奴制が解体して隷農—自由保有農となつた系譜が辿られる外に、元来英国農奴制の弱い事情として、特に東南部に socman, freeholder がマナー成立前より存在していた事に注意され、その様な小自由農を中心に局地内市場が展開して、英国農奴制の解体が促進されて来る事情をも強調される。

著者は先づ、socman, freeman を説明し、socman は軍事保有乃至役人としての保有でなく、共同体の成員に端を発する自由土地保有農民、古く共同体的な自由持分保有者の性格を強く持つが、その点自由保有農は、共同体外的存在として個人の資格において公文書により土地所有が保証されている者として特徴的に説明し、農奴制の解体外にある、共同体と共に古い自由保有農民が、H・C・ダービーの著書を参考して、特に東南部に卓越して認められる事を指摘される。

所で此の様な小自由保有農は、農奴制の解体過程においてどの様な対応を見せるか。著者は free socman 以上と bond socman とに

区別して論を進められるが、大体 copyholder, freeholder へと上昇する者と、villain へ転落する者とに分化し、bond socman 的中間的存在は消滅する。そしてマナー領主にとつて抑圧すべき、隷属化すべき反マナー的農民は、一部隷属化されて行く者の外に、上昇して自由保有農民乃至局地的商人となり、マナーに対立しマナーを崩して行く存在となつて行く。そしてマナー内部に進行する農奴制の分解と共に、マナー領王の封建的支配、封建的共同体的規制を弛緩せしめ、マナー領王の経済的基礎を日一日と困難ならしめると云われる。

茲にマナー領王はその封建的危機を乗切るべく、その搾取度を地代税金を通じて強化し（茲で地域的に賦役の強化を伴う地域と金融化を促進して行く地域との差を考えねばならぬと思うが）て行くが、それは一度解放を経験した農民の耐え難き負担となり、一三八一年の農民一揆を惹起するに到ると展望される。斯くて一揆は、旺盛になつて来た農民的生産力の封建的制約に対する反抗であつたが、その反封建的斗争の中核となつたものは日雇労働者層であつたが、そのリーダーは実に反封建的意志旺盛な gentleman, copyholder, freeholder であつた事が注意される。

然し稍々不満に思えるのは、東南部の自由農民を農奴制の解体過程外に、共同体と共に古くより存続している anti-manorial な存在として考え乍ら、マナー領王の封建的危機の現われ方を一般的概念的に考え過ぎられた様で、今少し斯様な自由農民の動向を参酌し、個別的具体的に描いて頂きかつた様に思う。

第二章「ヨーマンの歴史的性格」では、先づヨーマンの悲劇的運命を解説され、ヨーマンは農奴層の分解、封建的土地所有の解体より出て来たものであるが、又同じ運命をヨーマン自身が辿るとし、ヨーマンの出身をイングランド東南部の小自由保有農乃至 gavelind tenant に尋ねつつ、一般的なヨーマンの成立を論じ、諸家の説をまとめて自由農民及び農奴の子孫として、牧羊を副業とし自らの土地を賃借した土地と共に自ら経営して行く農民と考え、後には資本家的農夫、更には gentleman へと上昇して行く可能性を持つた者とする。

然し著者は、一応概念の複雑化を整理する意味で、ヨーマン層の不断の分化の結果、土地購買、囲込みを通じて大農経営化して行く者をそれより除外し、農奴制解体よりマニュの展開迄の時期にある比較的富裕な小土地所有農民として歴史的に規定されて行く。

そして副題が示す様に、H. Levy, Rae, W. Hasbach の見解を特徴的に対立させ乍ら論を進め、Rae, Hasbach のヨーマンの概念把握が曖昧で、その中に資本家的大借地農、殆ど gentleman 的存在をも含ませ、ヨーマンは十八世紀中確実に命脈を保ち、一八一五年—三三年の間の資本家的大農経営の発展、共同地の分割消滅の裡に没落する説に反対し、Levy の説を採り、ヨーマンを家族と共に自ら労働に参加する所の経営規模が五〇—一〇〇エーカーの独立自営農民と規定して行く。即ち、著者によれば、ヨーマン論争はヨーマンの歴史的性格把握の曖昧さより起るのであり、ヨーマンを、農奴制隷属関係の切崩し、近代資本主義的生産関係の準備をする歴史的存在として把握し、且つその成立の初めより不断に自己否定的な存在として分解して行く過渡的性格を強調し、Hasbach 的な富裕な大借地農としてでなく、Levy 的小土地所有農民を本来的ヨーマンとして厳密に考え、十八世紀の

資本主義的三分制の確立と共に十八世紀に急速に消滅して行くとされて、分解の結果上昇して残存した富裕な資本家的農夫乃至 grazier は本来的ヨーマンの範疇に入れられないとし、十八世紀の資本主義体制確立の時期にその歴史的役割をとげて消失して行くと云われる。此処は著者のヨーマン理解の核心があり、著者の厳密なヨーマン規定が本章、特に第四節に窺える様である。

第三章「ヨーマンと共同地」においては、ヨーマンが必ずしも一義的に反封建的存在として考えられず、共同地がヨーマンの依つて立つ重要な地盤であり、近代的傾斜を急ぐヨーマンの片脚がなお村落共同体と共同地にかかつていた事実を究明して行かれる。此れは従来のヨーマンに対する甘い考え方を修正せんとする著者の鋭い視角の表われであり、吾々に重要な示唆を与えて下さつたものであると思う。

先づ著者は、共同地の意義を解説し、マナー制度下における共同地をゴナーにより規定し、更に公共権を説明して行かれ、結局、著者の強調が稍々足りない様にも思えるが、共同地利用権は当時の耕地制・三圃制農法が維持されるのに必須の手段であり、農民の重要な再生産の場であつた事を述べられ、その共同地利用権を、王の法廷に訴えて最も強く利用し得た者は外ならぬ freeholder であり、それが彼らの富の蓄積を可能として行き、結局的には共同体の否定に向わしめると云う展望が与えられる。

所でそのヨーマンの片脚の依つて立つべき共同地は綜画運動の前に実は消滅して行き、その事がヨーマンの没落を急として行くと述べられるのであるが、その綜画の進展について、一応、十四・五世紀と十六・七世紀と十八世紀とに分けて特徴的に考えられ、十四・五世紀農産物・羊毛等の商品生産が進行するにつれて、慣習小作地は減少して、領主の a will に賃借地化され、土地の再分配と云う形で土地市場が進展して行き、それに伴つて（本格的には十五世紀後半）綜画運動が始まるとされるが、そこでは経営の合理化を意図した農民の利害関係より出た自生的運動としての綜画と領主乃至富農の牧羊地化を意図した共同地の侵害を伴う綜画とが並行し、前者は農民相互の同意による土地再分配であるが、後者は暴力的であり、農民の反抗も後者に対して強かつたと云われる。それが十六世紀末十七世紀になると新しい様相を帯びて来、交通運送が便利となり、新しい農耕法、草根栽培を基礎に、農耕経営の合理化・集約化のための大綜画がマニュ進行に共にそれらの地帯への食料・原料供給を意図して進む様になり、十八世紀に入るとその動きが俄然急となり、新興マニュの資本制的進展と共に近代的資本主義的農業経営への転換、土地集中が大々的に進み、共同地は収奪され、基盤の一角を崩されたヨーマンの分解はより急となつて行くと云われる。

以上の綜画運動の進展の叙述は全く同感であるが、著者が十五世紀以来の綜画運動の進展を、毛織物マニュ、工業マニュの進展に関連して、東南部より西南部、北部へと進み次第に中英の農耕地帯へ延びると説明される点は稍々納得出来ぬものであり、十六・七世紀以後盛んになる大綜画の進展はともかく、十四・五世紀に始まる農民の自生的運動としての綜画は、二五七頁の図及び註(4)で云われる様に北西部・東南部・西南部において同様に可成り早くより進んでいるのであり、夫々の地域における綜画の進展は夫々の地域の封建

的土地所有＝マナーのあり方と密接な連がりの下に進んでいる様に思われ、更に著者が、綜画の進展はコスミンスキーの賦役の金納化の進展と逆の経路をとると云われる点（二七二頁）も納得し難く、事実同じ頁で、村落共同体の強度と綜画の進展とが逆比例の関係にあると云われる事と矛盾するのではないかと思われる。何故ならば村落共同体の強度は賦役の金納化と逆比例の関係にあるからである。序でに本章への希望を述べさせて貰うならば、東南部則ち大領地域として規定して行かれる場合、前章前々章で強調された自由農民の多く存在する東南部との間に若干の用語の説明を加えて頂きたかつた事、及び、ヨーマンの没落に焦点を合せて綜画運動に言及された故当然十七・八世紀の大綜画が中心となつたのであるが、より早い農民の自生的運動としての小綜画とその綜画との連がりを説明して頂きたかつたと思う。云わば今後への希望を添えさせて頂く次第である。

稍々紹介が脇道にそれたが、本章の第五節においては、冒頭で紹介したヨーマンの分解に対する野心的見解が、ヨーマンと共同地の収奪の説明に関連して提起され、従来の資本家的農民へと云う単純な資本制分解の外にもう一つの上昇の型――yeoman-gentry-knight-noble へと云う寄生地主的上昇の型が A. L. Rowse 等を引用しつつ例示され、その様なヨーマン上層部の反動化が絶対王制の経済的社会的基礎となつて行くと説かれ、イギリス絶対王政の構造、延いては市民革命の構造把握に鋭いメスを入れて行かれる。

最後に第四章「ヨーマンの没落」では、マルクス以後の学者が殆どすべてヨーマンの没落の時期を十八世紀後半、十九世紀前半としているが、著者はマルクスの十八世紀消滅説を再検討して行かれる。その要点は、諸家のヨーマンの概念が粗雑に富裕農民としている事、ヨーマンの歴史的役割の正しい把握のない事であると云い、ヨーマンの没落を封建制より資本制への過渡、移行と云う問題の把握と関連させて考えるべき事を主張される。

その際 Gray の Oxford, Gloucester 州に関する研究、Davies の二〇〇〇教区に亘る調査研究、更に Lavlovsky の Suffolk に関する研究調査を操作して、大体十八世紀において小土地所有農民が資本家的借地農の増大に押され、極くわずかの土地しか所有出来なくなつたと云うヨーマン層の階層分化の急激な進展を説明され、斯してヨーマンは、マルクスの云う様に、略々確実に十七世紀後半・十八世紀に消滅しつつある、即ち此の市場関係の展開と共に、農耕技術の改革、経営の合理化が叫ばれて農業経営が資本主義化され、共同体的遺制はどんどん廃止されて行つたのであり、斯様な工業・農業の資本主義的生産の確立、共同体的遺制の衰化の時期にこそ、本来的ヨーマンは歴史的役割を終えて没落して行かねばならなかつたと云われるのである。

以上、私の理解出来た範囲内の事を紹介した迄で、種々読み違えた点も多くあつた事と思うが、ヨーマン概念の歴史的規定、ヨーマン層分解における上層部の反動的寄生地主化ヨーマンの二重性格の解剖、更にはヨーマンの没落等々、解決されるべき種々な問題が提起されており、吾々後学の者に数多い示唆を与えられたものと思う。最後に私の紹介が本書の真価を伝える事が出来なかつた事を謝し、稍々停滞気味の斯界の研究に力作を投ぜられた著者の労苦に対し心からの敬意を表したい。（未来社、五〇〇円）

――富沢霊岸――